

ブルクハルトと19世紀のバーゼル大学

—— 市民教育をめぐる ——

Jacob Burckhardt und die Universität Basel

森 田 猛
Takeshi Morita

はじめに

今日、ブルクハルト研究はひとつの転換期を迎えているといつてよい。従来の研究によって定着した文化史家あるいは歴史省察者・時代判断者としてのブルクハルト像は、順次、他の側面からの考察によって修正をうけている。旧来像とは異なる新しい全体像の可能性が模索されているのである⁽¹⁾。その背景には、研究が前提とすべき基本史料が近年になって新たに数多く公刊されたという事実がある。すなわち、今世紀半ばに着手された『書簡集』全10巻、ケーギによる学術的伝記『ブルクハルト伝』全7巻がいずれも完結し、ブルクハルトの講義・講演草稿の精確な原典批判版が相次いで公刊された⁽²⁾。これらの基本史料はいずれもブルクハルトの同時代との関係を具体的かつ克明にあとづけることを可能にするものであり、この分野に多くの可能性を開いたのである。ドイツを中心としたブルクハルト研究は現在、研究対象の内的多面性を反映しながら多様化しつつある。そのなかでとくに注目すべき方向は、ブルクハルト文化史学の理念・発想法・叙述方法、そこで展開された用語を史学理論の立場から点検し、かつ史学史の流れのなかに位置づけようとするイエーガー Friedrich Jaeger らの研究であろう⁽³⁾。これにより、文化史学の史学理論的価値が再認識されただけでなく、19世紀から今世紀へといたる史学史の流れのなかでこれを評価し、解釈するという新しい立場が提示されたのである。しかしながら、これらの研究はいずれも上記の基本史料を必ずしも必要とせず、史料が提示する新しい知見との関連性はきわめて低い点に問題があるように思われる。それと関連して、これらの研究において、ブルクハルトが用いた文化史的方法は、19世紀という具体的な史的環境のなかに生きたブルクハルト自身の実像から切り離されて論究され、あまりにも現代的な立場から解釈されている。換言すれば、ここに史学理論的研究と伝記的研究の二極化現象ともいえるべき、今日のブルクハルト研究の問題点

を見ることができるのである。

この二極化現象によって、ブルクハルト研究が看過してきた課題は、文化史学に関係する問題に範囲を限定しても、多々指摘することができる。たとえば、『ギリシア文化史』や『世界史的考察』はブルクハルトの著作として扱われてきたが、これは19世紀のバーゼル大学において特定の学生の前で講じられた講義である。したがって不特定多数の読者を想定した著作『イタリア・ルネサンスの文化』とは、異なる目的、計画をもっていたはずであるが、この点に言及した研究は皆無に等しい。今日的立場から注目を集める『ギリシア文化史』の「叙述方法」もそのような大学の教室における教育手段のひとつとして採用されたものであり、決して史学界への理論的挑戦を意図したものではなかった。このように、二極化現象がもたらす研究上の欠陥は、ブルクハルトの「業績」をブルクハルト自身の意図を半ば無視する形で解釈するような傾向をもたらす点にある。近年、ようやく講義本来の目的・意図と、ブルクハルト没後に編集刊行された講義草稿が与えた影響とを区別すべきだとする研究が提出されるようになってきたが、このような主張が基本史料のひとつである講義草稿の精査から出発していることに注目しなければならない⁽⁴⁾。今後のブルクハルト研究には、このような基本史料に依拠しながら史学理論的研究と伝記的研究との有機的連関を求め、そのなかからブルクハルトの遺した業績を評価し、位置づけるという課題が残されているといえるだろう。

以上のような研究史上の問題点を勘案して、本稿は、これまでの研究が著作と同一視してきたブルクハルトの歴史学講義をそれがバーゼル大学という特定の大学の教育活動の一環であったという特殊性に着目しながら、その目的と役割について史的考察を行うことに主眼をおく。大学における講義・教育こそ、ブルクハルトがその後の著述活動を断念して専心した知的営為であり、かつ彼が考える文化史学の方法が最大限に活用された場である。したがって、この講義の考察は、

史学理論的研究と伝記的研究の接点に位置し、両者の架橋のみならず、より問題提議的な全体像の構築に手がかりを与える可能性をもつだろう。本稿はまずこの方向にたいする大まかな見取り図を与えることを目標にする。方法としてはつぎのような手順をふみたい。最初に、講義の場としてブルクハルトによって主体的に選ばれた19世紀のバーゼル大学の史的特質を同時代の国家・社会にたいする関わりに留意しながら論究し、つぎにこの大学における彼の歴史学講義全体の概要とその内容についての基本的な特徴を示す。最後にそのような教育の史的位置づけ、意義について、ブルクハルト自身の講義の内容から具体的な手がかりを得ながら考察を加える。

一、19世紀バーゼル大学の変遷とブルクハルト

ドイツ国内の数多くの大学の招聘を固辞しながら、ブルクハルトがスイス連邦最古の大学であるバーゼル大学の教壇に立ち続けたことは、よく知られているところである。1858年同大学哲学部の歴史学正教授に就任した際に、「この職務に全力であたることに私の人生の目的があることを知りました⁽⁸⁾」と彼は書簡に書き記しているが、その後の彼の活動を一瞥すれば、これが誇張でなかったことは明白である。バーゼル大学は彼にとって事物の有用性をはかる尺度であり、彼の営為はこの大学と不可分の関係にある⁽⁹⁾。したがって19世紀当時のバーゼル大学がいかなる大学であったかという問題は、ブルクハルト研究に不可欠な要素と見なされてしかるべきである。だが、今日までこの大学の詳細な実状と具体的な特性は、多くのブルクハルト研究者の視野の外におかれていたのである。

1460年に創設されたバーゼル大学はドイツ語文化圏の諸大学網のなかに位置している。この大学が19世紀に経験した大小の改革を通じて、ドイツ国内の大学とは異なる独自の路線を歩んだことが注目に値する。諸改革のなかでブルクハルトの正教授就任以前に行われ、彼の職務内容を直接規定することになったものは、1818年と1835年および1852年の改革である。以下、ブルクハルトの教育活動に関わる事項を中心に、それぞれの改革の概要を示したい。

ブルクハルトの生年1818年に行われた大学改革は、中世的都市大学であったこの大学を近代的な州立大学に変革したものである。この改革が断行される直前、中世以来の古い体質を残すバーゼル大学は、全くの停滞状態に陥っていた⁽⁷⁾。その主な原因は、大学が依拠する経済基盤が極度に乏しいものであったことと、1544年の規定以来、教員採用をバーゼル市民の枠内に限っ

ていたことにある⁽⁸⁾。1818年の改革は、大学裁判権など大学がもつ旧来の特権を放棄して、経営主体をカントン（州）政府に移管することによって安定した財源を確保するところからはじまった。この改革によって州立大学となったバーゼル大学は組織運営上のあり方も近代化し、学内の教育・研究環境は大いに改善した⁽⁹⁾。バーゼル大学史において特筆すべきこの改革は、19世紀前半ドイツ諸大学で行われた改革と比較したとき、哲学部の変革において独自性をもつ。神・法・医学の専門三学部にたいする教養部的存在であった哲学部は、この時期の改革によって専門学部昇格した。ドイツ諸大学の哲学部はこれを機に専門教育にその機能を限定していった。それにたいしバーゼル大学哲学部はギムナジウムと大学との間に設置された古典語系後期中等教育機関「大学予科 Pädagogium」における職務兼務を教員に義務づけ、従来から担っている基礎教育的役割を存続させたのである⁽¹⁰⁾。

政治的同権化問題に端を発するバーゼル州内の都市部と農村部の対立（1830-33年）は、このような州立大学に財政面で大打撃を与えた。連邦の調停によって結果した都市部と農村部への州二分割は、州立大学財産の二分割要求と大学経営の財源たる歳入の大幅減少をもたらした。都市部に所在するバーゼル大学を存亡の危機にさらした⁽¹¹⁾。この危機から大学を救ったものは、バーゼル・シュタット（都市部）州政府だけでなく、市民団体である自由意志大学協会 *Freiwillige Akademische Gesellschaft*（1835年創立）の財政援助である。1835年の改革はこのような都市市民の援助によって存続にこぎつけたバーゼル大学の今後の運営上の基本方針を規定したものであった。それによれば、財政的な弱体化を余儀なくされた同大学は、高等教育に期待される専門研究と職業教育すなわち専門教育機能をさしあたっては断念し、他大学における専門教育にそなえ準備する基礎教育的 *propädeusch* な役割に専念することを今後の方針とする⁽¹²⁾。これは大学再建に尽くしたバーゼルの都市と市民への奉仕を大学の主要目標に掲げたことと深く関係している。なぜなら、バーゼル大学における基礎教育とは単に学術研究上の基礎教育だけを意味するのではなく、将来の市民生活に必須の教養を授けることをとも意味していたからである。そのため、改革の一環として、1819年以来行ってきた成人教育企画である市民大学講座や公開講演の拡充が約束されており、この大学の伝統路線である「市民精神の醸成」にたいする寄与、市民教育の一層の強化が図られている。さらにここで注目すべきことは、この大学が考える市民教育が、新人文主義的に理解さ

れた人格陶冶を主眼とする教養教育を意味したことであろう。ここで語られる「市民」とは具体的には高等教育を受けて専門職につく、教養ある市民層を中心に考えられているのである。

1849年に州議会 Grosser Rat 内の急進派による学校改革要求からはじまった50年代前半の「バーゼル大学不要論」は、このような新人文主義的なバーゼル大学のあり方に試練を与えた。工業化の波の高まりにともない激化した都市部への人口流入は、バーゼル市の住民構成を変えた。商工業者など経済市民層を中心とした新住民層の意見を代弁する急進派は、旧来の支配層にたいすと同様、伝統的な教育制度のあり方にたいしても批判の矢を放った⁽¹³⁾。彼らは今日のバーゼルの支える産業界の担い手を養成することを教育に要求し、大学を頂点とする人文主義的な現行の教育制度の無能を説いた。その観点から彼らは、徒に都市財政を圧迫するに過ぎない大学の廃止と新住民層のニーズにあった実科系の実業学校 Gewerbeschule の設立を要求したのである⁽¹⁴⁾。同じ時期に、連邦立大学の開学構想も打ち出され、州立バーゼル大学はその存在意義を問われることになった⁽¹⁵⁾。だが、これによって生じた論争を通じて、バーゼル市に奉仕する存在としてのバーゼル大学の存在理由が再認識され、そのようなあり方が意識的に強化される結果となった⁽¹⁶⁾。1852年の大学法の修正はその一環であるが、ここで新たに加えられた内容は、哲学部教員の大学予科等、後期中等教育機関における大幅な負担増である⁽¹⁷⁾。すなわち、基礎教育機能を拡充することが市民的精神の醸成を一層実り豊かなものとし、そのことが大学の存在理由たる都市への奉仕を保証するという人文主義的教育理念の基本的発想がここにも見られるのである。

このように19世紀のバーゼル大学は、国家、社会との関係、教育財政を含む教育をめぐる諸状況の変化のなかで、一貫して基礎教育に主眼を置いた人文主義的な「市民的大学」として発展してきたのであり、哲学部はそのもっとも特徴的な位置を占めている。1858年に就任した哲学部正教授ブルクハルトに期待されたものも、基礎教育を通じての有用なる市民の育成にあり、彼の職務内容はこの目的にしたがって特殊化されたものである。同時代のドイツ大学哲学部の正教授は学部における専門教育に従事し、研究職やギムナジウム教員など特定の専門職につくための高度な職業教育を期待されていた。一方、バーゼルのブルクハルトは学部における基礎教育としての歴史学講義、それより多くの時間数を費やしての大学予科における歴史の授業、さらに毎年公開講演の演壇に立つことが求められ

た⁽¹⁸⁾。専門的な知識の伝授よりも広い意味での教養教育が期待されていたのである。しかし、このような職務内容あるいは大学のあり方にブルクハルトはバーゼル大学の後進性ではなく、むしろドイツの大学にはない特別な価値を認めていた。人文主義的市民教育に主眼をおいたこの大学には、教養ある市民の知的共同体としての雰囲気息づいており、官僚養成組織と化したドイツ国内の大規模大学とは異なり、教師と学生との関係は共同体的な私的かつ自由な性格を維持していた。ブルクハルトの聲に接した学生たちは、周到に用意された講義内容のみならず、彼と私的に語り合った談論や交流をいつまでも記憶にとどめたのである⁽¹⁹⁾。

注目しなければならないことは、このような市民教育的な性格をもった19世紀のバーゼル大学が学問的に沈滞期にあったのではなく、むしろ最盛期を迎えていたことである。この大学を中心としたバーゼルの19世紀は、文化的にはエラスムスが活躍した15世紀と並ぶ、バーゼル人文主義の第二の興隆期と位置づけられている⁽²⁰⁾。この時期、ブルクハルト以外にも『母権論』を著したバハオーフェンや哲学者ニーチェ、神学者オーファーベックらが教壇に立ち、ここからノーベル文学賞受賞者シュピッターや美術史家ヴェルフリンらが輩出した。マイネッケが指摘したように、プロイセンのベルリンと対極的な立場にあつて、しかも精神科学における業績において、ベルリンと比肩しうるドイツ文化のもう一つの頂点をなす知的環境として、この時代のバーゼルを見ることができるのである⁽²¹⁾。学生数や教員数においてベルリンの割にも満たないこの小規模大学が、独特の知的業績を生んだ全ドイツ的な文化拠点として存立したのであり、ブルクハルトがバーゼ尔的な知のあり方、教育を積極的に評価する根拠の一端がここに示されているといえる。1871年にこの地で講演を行った若きニーチェは、「不釣り合いなほど立派な意味において、そして大国をも恐縮させるような基準において、市民の教育 (die Bildung und Erziehung ihrer Bürger) を推進しようとしている都市⁽²²⁾」とバーゼルを呼んだが、まさに大学を中心とした人文主義的な市民教育のあり方にこそ、知的環境としてのバーゼルの特性があるのである。

二、ブルクハルトの歴史学講義

バーゼル大学におけるブルクハルトの歴史学講義は、同大学の人文主義的市民教育の特質を反映したものであり、教養ある市民層にたいする基礎教育的性格をもっていた。それでは、具体的にはそれはどのような

な形態をとって行われたのであろうか。ブルクハルトは歴史学講義を通じて聴講者に何を伝えようとしたのであろうか。彼の同大学における職務全体については、ケーギがすでに大まかな概略を行っている。ここではそれに依拠しつつ、さらに詳細に彼の講義活動全体を探りたい。その際、当時のバーゼル大学生という具体的な受け手にたいする教育効果を勘案しながら、講義内容に託されたブルクハルトの意図を探るという方法をとりたい。このようなブルクハルトの講義の聴衆との関係は、これまでの研究が看過してきた課題であった。ケーギによれば、ブルクハルトの教職は立場、職務構成から五つの時期に区分けされている⁽²³⁾。それは、歴史学講座を主宰する正教授フロート Hartwig Floto の代理を行っていた時期(1858-61年)、フロートの退職によって歴史学講座に正式に就いた時期(1861-74年)、大学における美術史講義を兼任した時期(1874-83年)、ギムナジウム上級学年(かつての大学予科)の任を解かれ大学における講義のみを行った時期(1883-86年)、歴史学講義の任を解かれ、美術史講義のみを行った時期(1886-93年)である⁽²⁴⁾。このなかで、彼が行った歴史学講義は、1858年から1886年にいたるまで一定して週5時間行われ、それは4時間の主要テーマと1時間の副テーマとに分かれる⁽²⁵⁾。

ケーギは、ブルクハルトの歴史学講義全体を見渡し、主要テーマにおける「四学期講義サイクル」というものを抽出している。すなわち、「古代史」、「中世史」、「1763年までの近代史」、「革命時代史」の講義を各学期一つずつ講じ、それを繰り返すというものである⁽²⁶⁾。ただし、1866年から1882年までの間、中世史講義を同僚のフィッシャー Wilhelm Vischer-Heussler に委ね、その間は中世史は担当しておらず、そのような多少の例外はあるが、まずはこのサイクルにしたがって規則的に講義を回していたという。ケーギの考察を補足するものは、ツィーグラ E. Ziegler によるブルクハルト講義題目一覧表である⁽²⁷⁾。これによれば、ブルクハルトの典型的な講義サイクルは、「ギリシア文化史」がはじめて講じられた1872年に完成したように思われる。仮に1870/71年冬学期からの四学期を例にとれば、1870/71年冬学期「1450年以後の近代史」、1871年夏学期「17・18世紀の歴史」、1871/72年冬学期「革命時代の歴史」、1872年夏学期「ギリシア文化史」となり、つぎの四学期もこの繰り返しとなる。講義題目表からまず気付くことは、文化史的著書である『コンスタンティヌス大帝の時代』や『イタリア・ルネサンスの文化』が対象としたローマ帝政後期やルネサンス期イタリアが講義の主要テーマとして取り上げられるこ

とがほとんどないことである。ブルクハルトが一般読者にたいするのとは異なる何かをバーゼル大学の学生、聴衆に与えようとしていたことは、このことから伺われる。以下、ブルクハルトが聴衆に与えようとしたものを主要テーマの講義内容をもとに検討していこう。

講義サイクルを形成する第一の講義「1450年以後の近代史」は1450年から1598年にいたる宗教改革を中心としたヨーロッパ近世史である。第二講義「17・18世紀史」は1598年から1763年にいたる絶対主義時代のヨーロッパ近代史であり、第三講義「革命時代史」はフランス革命にはじまるヨーロッパ現代史である。この三者は、時代区分的にも内容的にも連続的に継起する一つの現象を基調とした一連のシリーズ的なつながりをもっている。その現象とは、第一講義冒頭に述べられている「近代史の主要な形成物である大国家 Großstaat⁽²⁸⁾」の発展である。教会、騎士制度、都市国家というヨーロッパ中世社会に特徴的なさまざまな中間権力が没落するなかで、この近代的な大国家が次代の物質的な利害を保護し、法的平等を約束するものとして権力を集中させ、文化や私生活の領域にいたるまでその力を浸透させていくのである。

第一講義の中心課題である宗教改革は、ブルクハルトの眼を通して見られたとき、この大国家の形成・発展に格好の社会的根拠を与えるものであった。ルターの宗教的懊悩から発したこの改革は、社会運動段階に移行するにあたって、本来の思想性を失い、禁欲を含む伝統的な宗教的義務の放棄と伝統社会の桎梏一般の解除要求を意味するようになった。このような社会運動としての宗教改革は、大衆の願望と合致しながら拡大し、宗教権力や伝統社会の秩序を凋落させることによって、結果的に国家権力の相対的な優位性を確実なものとした。内戦状況を惹起する可能性をはらんだ宗教改革運動は、これにたいする対応如何によって、それぞれの近代国家のその後の運命をも規定していくものである。

第二講義で扱われた絶対主義国家の展開は、そのような宗教改革によって誕生した大国家の権力伸張とヨーロッパの社会との関係から叙述されている。この講義においてブルクハルトが考えるヨーロッパ史の特質「調和せる不調和」が説かれているが、これこそ、この時期に危機に陥った史的実態なのである⁽²⁹⁾。すべてを単一化しようとする国家権力にたいして、抑止力となるヨーロッパ的社会の存在が異質なものの共存を可能にし、それによって他の地域にはない独特な経緯をヨーロッパ史はたどることになった。そのような社

会は、聖職者や貴族層からなる特権身分やそこから自力で自治を獲得した都市国家の市民層などによって構成され、種々の中間権力を形成しながら伝統的秩序を構成していた。ルイ14世時代のフランス王政に代表されるような、他の国家と対立しつつ、あらゆる方面に支配権を行使しようとする絶対主義国家の発展は、このような中間権力の勢力均衡の上に立ちながら、これを抑圧しようとした。そうすることによって多様性、多面性を最大限に許容しながら調和をもつヨーロッパ史の特性を解消する危険性を秘めていたといえるだろう。しかしながら絶対主義国家の国民国家への進展過程は、これと緊張関係にあるヨーロッパ的特質とまだ均衡を保ちながら進行することができた。講義範囲の時期区分を決定した1763年のフベルトゥスブルクの和約は、このような絶対主義国家間の最後の戦いを締めくくった条約であり、これ以降の時代はこのような均衡が実質的に崩壊していく時期にあたる。

第三講義は、フランス革命史を中心としたブルクハルトおよび彼の同時代人にとっての「現代史」である⁽³⁰⁾。この時期、大国家はかつてない強大化を実現したが、それを可能にしたものは、革命およびそれに先行する啓蒙主義思想がもたらした「新しい国家概念」である⁽³¹⁾。社会契約説以来、国家の正当性を根拠づけるものは、旧来の伝統を支えとした権威ではなく、理性的に構築された法理的理論である。これによって招来したものは、国家というものは、さまざまな改訂によって順次そのあり方を変革できるという考え方であり、また、社会のさまざまな矛盾を国家の力によって「上」から処理・解決しなければならないという考え方である。もはや人は社会にではなく、国家の強制力にすべてを期待する。ここにおいて概念上の国家の機能、役割は大きく拡大した。その結果、伝統社会にあっては区分けされていた国家と社会の役割の境界線は順次変更され、本来社会が担うべきである役割を国家が吸収していくというのがブルクハルトの見解である。その最たるものが、「国家による人倫的なものの実現⁽³²⁾」というテーゼである。これは国家権力の未曾有の拡大を可能にしていくものであり、国家・宗教・文化というブルクハルトが考える歴史を構成する諸力のバランスを大きく崩れていく。三つの力が相互に規制しあいつつ均衡を保っていることが「調和せる不調和たる」ヨーロッパ史を貫く特性を可能にしてきたものであり、国家の無制約の肥大化はこのヨーロッパ的特質に終焉をもたらすのである。近代においてとくに注目すべき規制関係は国家と文化との規制関係であるが、自発的な精神の発展の総和である文化は、国家にたいし

て社会という形式をとりながら、国家権力がもつ普遍妥当性を批判しつつこれを解体してきた。しかし、拡大した近代の国家概念のもと、社会すなわち文化は勢力範囲を著しく限界づけられ、国家を制約する機能を低下させつつある。革命時代の特徴は、肥大化した国家が他の諸力を支配し、逆に国家を規制し抑制する力が弱体化して、国家の暴走を止める手だてが何もないことにある。

ブルクハルトはこのような革命時代における人間の精神的傾向の変化を見逃さない。啓蒙主義思想家ルソーの性善説的思想は、キリスト教的原罪思想からの人間の欲求を解放した⁽³³⁾。全面的に肯定された人間の欲求は、自発的な活動によってではなく、国家への要求という手段によってその充足を求めるようとする。これがこの時代の顕著な精神的特性である。フランス革命において行われた国家権力による封建的特権の撤廃、身分社会の解体はその典型である。ここに登場する新たな人間類型は、旧社会において自力で自由を勝ち取り、権利と表裏関係にある義務の遂行によってこれを守ろうとした中世都市の市民層とは全く異質の存在である。それは利得と安全性という己の願望を国家に向かって権利として要求する「大衆」であり、やがてこれはこの時代の支配的な人間類型となっていく。ブルクハルトは強大化していく国家と大衆の欲望との利害の一致を洞察する。大衆は己の欲求を充たしてくれる国家であるなら、いかなる国家であっても喜んでこれを承認するのである。ここに民主制が容易に独裁制に身売りする可能性が暗示されている。事実、この講義の最後に登場するものは、フランス革命の帰結としてのナポレオン独裁制の詳述であった⁽³⁴⁾。

このようなヨーロッパ近現代史のシリーズとシリーズの谷間に、第四講義としての「ギリシア文化史」が入るという講義サイクルの配列は注目に値する。歴史学講義を継続的に聴講する学生にとって、「ギリシア文化史」は近現代史のあとか先かに必ず聴講することになるのであり、必然的に近現代ヨーロッパと古代ギリシアとを比較する視点に立つことが促される。ここで両者の間には何らかの内的な相互関係があることが予想されるだろう。「ギリシア文化史」の目的は「ギリシア人の考え方とものの見方の歴史を示し、ギリシア人の生活のなかに働いていた建設的な力と破壊的な力についての認識を得よう努めること⁽³⁵⁾」であった。だが、これは古代ギリシア人という特定の民族固有の史的精神現象を認識することだけを意味するのではない。なぜなら、ブルクハルト自身が明言するように「われわれはギリシア人の眼をもって見、そしてギリシア

人の表現を使って表現している⁽³⁶⁾」からであり、ギリシア精神は現在のヨーロッパ文化の根幹をなす本質的要素と見なされるからである。したがって、ギリシア精神の認識は、自己認識をも意味する。それは、ギリシア以来の精神的な連続性をもつヨーロッパに生きる者としての自己認識である。ここで三つの近現代史講義のモチーフとなったものが、大国家の躍進とヨーロッパ的なものの危機であったことに注目しなくてはならない。まさに四つの講義からなる主要テーマのサイクルは、ヨーロッパ的なものを媒介にして、相互に内的連関性をもつものなのである。「ギリシア文化史」は三つの諸力の立場から古代ギリシア人の全体像を提示する一方、それとは対照的な存在になりつつある近代の生活を対比的に登場させている⁽³⁷⁾。このことから、現在の生活を史的観点からとらえ直し、そのなかでヨーロッパ的なものの後退に警告を発するという意図が彼の講義にあったことは明白である。彼の講義を聴講する者は、民主化・工業化による物質面における繁栄に隠された、自分たちの内的本質の危機を意識したはずである。

このような古代と近現代を連関させたヨーロッパ普遍史の講義は、19世紀後半のドイツにおける歴史学教育と比較したとき、どのような点で特徴的であろうか。この時代、ドイツ大学においては、歴史学が専門教育科目として位置づけられ、したがってその教育のあり方は専門研究のあり方によって規定された。歴史研究の専門分化が進展する過程で、大学における講座も大規模大学を中心に分化していく傾向にあった。具体的には、歴史学が哲学部における正式な講座としてようやく認知された19世紀前半は、歴史学（一般）講座が各大学に設置され、その数を増加させたが、19世紀後半にはむしろ、古代史、中世史、近代史、あるいは国民史という講座の分化をもたらした。歴史学一般という講座はむしろ減少傾向にあった⁽³⁸⁾。そのなかで、特筆すべき現象は、研究・教育において古代史と中世・近代史とを人的にも組織的にも分離する傾向である。この点にかんして歴史学研究の中心的専門誌となる『史学雑誌 Historische Zeitschrift』を創刊するにあたって、ランケが示した提案が重要な史料となる。彼は過去の数々の史学専門誌の失敗を分析し、専門誌の成否は、政治問題への直接的な関与をさけることと、対象分野の範囲を限定することにかかっていると判断した。そして、対象範囲の限定の具体策として古代史の出来る限りの排除と中世史のドイツ史重点化を提案している⁽³⁹⁾。実際、編集責任者ジーベルの『史学雑誌』創刊号（1859年刊）緒言は、このランケの提案を色濃

く反映したものであり⁽⁴⁰⁾、その後のドイツにおける史学研究の方向を規定した。ドイツ大学における歴史学教育がこの研究動向に規定され、ここから次代の専門研究者だけでなくギムナジウム教員も育成された。したがって、中等教育における歴史教育も、このような史学界からの影響を免れえないのである。

このランケの提案は、結果的にドイツにおける国民意識の形成に深く関わっている点でさらに検討を要する。すなわち、古代史の排除は、ドイツにおける歴史認識からの南欧的なものの排除を意味し、中世史におけるドイツ史重視は、近代における国民国家建設につながる国民史的傾向を醸成する。ここに諸国民を神の思想ととらえ、国民国家の成立に歴史的必然性を積極的に認めた後期ランケの史学思想を読みとることができただけでなく、これがドイツにおける歴史教育一般に反映されたとき、ギリシア・ローマと内的につながるヨーロッパ人としてではなく、中世の神聖ローマ帝国以来の連続性をもつドイツ国民としての意識を定着させる機能をもつことに注目しなくてはならない。すなわち、ドイツにおける歴史学が専門化の過程でドイツ国民主義的な教育傾向を自ずと準備することになったのである。ブルクハルトはそのような時代にギリシア精神を基底におきつつ、南欧を含めた全ヨーロッパ普遍史を講じ続けた。ここに大学における歴史学教育を舞台としたドイツ主義とヨーロッパ主義との対決を見ることができるのである。

三、「19世紀における歴史学」と「われわれの課題」

ブルクハルトが市民的大学において行ったヨーロッパ主義的な歴史学講義を同時代の状況のなかで史学史的に位置づけ、その史的意義を考察するためには、19世紀において歴史学がいかなる立場にあり、いかなる役割を果たすべきかという彼自身の歴史学にかんする時代判断を確認しなければならない⁽⁴¹⁾。講義「歴史の研究について」は、ブルクハルトの史学思想を集約的に表した歴史学基礎論であったが、1851年夏学期に講じた「歴史研究入門」を原型とした聴講者にたいする歴史研究法・思考法入門としての側面をもっており、初学者にたいするブルクハルトの基本的態度を知る上でも貴重な史料である。事実、三度副テーマとして講じられたこの講義は、つねに主要テーマ・サイクルの第一講義と平行して行われており、ブルクハルト自身、これを入門講座として意識しながら取り扱ったように思われる。彼はこの講義を三度目に講じた1872/73年冬学期において序論に大幅な追加項目を差し入れた。それが「19世紀における歴史学」および「われわれの

課題」であり、ここで問題にすべき、歴史学にかんする時代判断が示された箇所にあたる⁽⁴²⁾。

「19世紀における歴史学」においてまず問題とされているものは、自分たち19世紀の人間が持ち合わせている歴史的な認識能力である。ブルクハルトはこれについて、未来にたいする認識ははなはだ不確実なものといわざるを得ないが、過去についての認識は従来よりも有利な条件を備えていると判断している⁽⁴³⁾。その条件とは、外的なものとしては、史料へのアクセスが従来よりもはるかに容易になったことがあげられる。これは、旅行・外国語教育の普及、写真技術の発達、さらには文書館などの完備や種々の史料編纂事業といった工業化や科学的進展の産物、近代世界を構成する諸要素に多くを負っている。この点から、近代世界の利点にたいしてもブルクハルトが隈無く眼を向けていることが確認できるだろう。さらに内的な条件として、消極的なものと積極的なものとがあげられているが、消極的な条件とは現在の国家と宗教がさしあたっては歴史研究を妨げようとしていないことである。

積極的な条件、促進要因は18世紀末以来の革命時代の本質そのものに存する点でもっとも重要な側面をなしている。ブルクハルトによれば、革命時代の動揺と激しい変化それ自体が、過去の研究へと人を駆り立てるような性格をもっているのである⁽⁴⁴⁾。歴史研究が、この激動の速度と力を見極めるための基準を示し、それによって伝統社会に根ざすよりどころを喪失した人間に立脚点を与えることができるからである。したがって、ここで強調されることは、歴史認識と結びついた自己認識の可能性とその必要性であり、人間の生の指針に不可欠な要素としての歴史研究である。そのような歴史研究は、単に物質的な因果関係よりも精神的な因果関係を深く追究することによって、より多くの成果を得るであろう。啓蒙主義思想とフランス革命の結果、さらに拡大した視野を前提とした新たな世界像の要請から生じた歴史哲学の影響によって、そのような内的な因果関係に分け入る歴史認識が時代の要求として浮かび上がってくるのである。ここにブルクハルトが判断した19世紀すなわち革命時代における歴史学の意義と役割とがある。このような時代の要請を果たしうる歴史学が職業化した専門研究者による専門研究ではなく、むしろ脱専門化した歴史研究であるとブルクハルトが考えたことは注目に値する。

次節「われわれの課題」で説かれているものは、そのような脱専門化したアマチュア歴史研究の勧めである。この節の最初に、現今の歴史研究の興隆が、極度に専門分化した個別研究を不可避なものとし、史実の

専門的な実証研究が専門家以外のこの分野への参入を自ずと拒んでいる状況が提示されている。ブルクハルトはこのような研究にたずさわる専門研究者を志向する一部の学生ではなく、「大学教育を受けたすべての人々」すなわち教養ある市民層としての学生全員を対象とし、とくに将来歴史学を専攻しない「非専門家」にたいして示唆を与えることにこの講義の水準をすえている⁽⁴⁵⁾。教養ある市民層にたいする教育は、当時のバーゼル大学の基本路線であるが、ブルクハルトはそのなかで歴史学が占めるべき中核的地位とそれがもつ独特の意義を意識していた。ブルクハルトによれば、歴史学は教養ある市民層の内的本質に深く関わる必須の科目であり、他の専門科目のような専門研究者によって独占される専門研究とは次元を異にするもうひとつの側面をもっている。彼は史実が個別・特殊な価値だけでなく、普遍的・歴史的な価値を持つことに聴講者の注意を喚起する。すなわち、人間精神の一定の時代における個的表出として史実を見る立場に立ち、史実に内在する精神的な意味連関を感得することを目的とした歴史認識が成立しうるのである。ここで問題になるのは、史実の物質的な真偽ではなく、史実全体を通して浮かび上がる人間の内的本質であり、これは一定の明確な形姿をもった歴史像として、特定の時代の特性を典型的に表現しながら、探究する者の内面に関わってくる。このような典型的なものを追究する歴史研究の方法こそ、「ギリシア文化史」序論で提唱した文化史学の方法である⁽⁴⁶⁾。

リュゼン J. Rüsen が指摘するように、ここには近代歴史学が専門分化によって喪失しつつある教育機能を確保しようとするブルクハルトの意図が隠されている⁽⁴⁷⁾。歴史がもつ教育機能とは歴史の総体を媒介にした史的自己認識であり、そのためには脱専門化によって全体性をもった歴史像を確保することが不可欠なのである。したがって、個々の分析よりも全体性をもった叙述を重視する文化史的方法是歴史学の教育機能を保持する役割を果たすものとして構築されているのである。これを用いて脱専門化を図った歴史研究は、通常の意味での学術業績ではなく、あくまで探究者が歴史研究を通じて得ることができる教育効果を主たる目的としている。そのため、この研究活動は、特定期間に達成すべき合目的的作業とは異なる、探究者すなわち学生自身が一生涯継続すべき認識作業であるといえるだろう。ブルクハルトはこれを教養ある市民としての生活様式の根幹をなすべき本質的要素と見なし、それに向けての最低限の手ほどきをするに講義の目的をおいている。そのため、「われわれの課題」は、「ギ

ロシア文化史」序論と共通して、学生の今後の知的生活全体にたいする具体的な注意事項をそのなかに数多く含んでいるのである。

そのような知的生活にかんする指示のなかで、歴史研究との関係上、特筆に値するものが読書生活にかんするものである。これらの講義は、新聞や新刊小説の多読をかたく戒め、あくまで過去の精神を告げ報せる史料、とくに古典を読むことを繰り返し指示している⁽⁴⁸⁾。これは現今の読書生活における非歴史化現象を批判したものであり、非歴史化現象とは過去との連関を失った超現在の情報提供を主たる目的とする新聞の通読が主な読書形式になることをその典型的な現れとしている。ブルクハルトはこの現象がもたらす精神的な荒廃を問題視している。荒廃の具体的な内容は、さまざまな意図的な見解にたいする自立した判断力の欠如であり、そのため生じる迎合の日常化であり、さらにそれが一般化したとき結果する「考え方の水平化」現象である。これは新聞という情報媒体の成功の結果である以上に原因である⁽⁴⁹⁾。法的平等化が順次達成されていく近代民主主義的社会において、国政を左右する世論がそのような迎合によって形成されるとすれば、情報操作を手段とした「合法的な」社会支配は、平等化が浸透するにしたがって達成が容易になるであろう。

このような状況をふまえたとき、自己認識を目的とした教養ある市民層の歴史研究は、とくに同時代にたいして、いかなる意味をもつのであろうか。また、それによってブルクハルトは教養ある市民層に何を求め、何を期待したのであろうか。これについて「われわれの課題」はつぎのように述べている。

そもそもわれわれにとって大切なことは、日常の倦怠にさらされることなく、思想の連続性を貫徹しようような意志と心情の持ち主になることである。そのような人物は想像力を十分に身につけているので、素材としての他者の想像力を必要としない。たとえ、他者の想像力を受け容れるにしても、それに支配されるのではなく、あくまで別の対象としてこれに接することができるのである⁽⁵⁰⁾。

彼が教養ある市民層としての学生に求めたことは、一個の個人として、自立的な判断力と「客観的」な認識力をもつことであり、それによって他者の意見にたいする一定度の自由と公正さを保持することにほかならない。「客観的」な認識は意図的な見解と対置されるものであり、さらにこれに対抗しうるもっとも有効な武器である⁽⁵¹⁾。そして、そのような認識を可能たらし

めるものこそ、自己認識としての歴史研究にほかならない。事物にたいする「客観」性は、現在を相対化しえたときにはじめて達成される。認識において、相対化されるべき「現在」を構成するものは、現在の自分ないしは自分が所属する集団がもつ広義の利害関係、エゴイズムである。それを達成するには「現在」を超えるより高い視点と広い視野に立った判断基準が必要である。過去にたいしてかつてない認識能力をもつ19世紀において、過去の全体を取り込んだ歴史的視点こそが、まさにそのような現在を超えるもっとも確実な視点であろう。そして、ブルクハルトが講義において提示するヨーロッパ普遍史はまさに現在の激動の時代をはかる判断基準を与えるものである。

ここで問題となることは、このような歴史研究を阻害する要因が当時の歴史学そのものの内部にも存在するとブルクハルトが判断していたことである。それは、現在を相対化するのではなく、現在の立場、現在の利害関係から過去の歴史を探究し解釈するという立場である。とくにそれは国民国家建設という政治的目標と不可分の関係にあったドイツ史学が醸成したドイツ主義的歴史意識に顕著である。これがドイツ国民としての愛国主義的な国民意識に直結し、国家の強権化を助長したことは決して看過されてはならない。さらに1871年のドイツ帝国成立後は、現在の繁栄の基礎を過去に求めようという成功者に特有な俗物的回顧の傾向もこれに加わり、帝国の対外発展政策にたいする賛同すら煽りようになる。この側面から見たとき、国民意識は集団エゴイズムの美名にすぎず、愛国心は他の国民にたいする傲慢にすぎないことがわかる⁽⁵²⁾。そして、これらは革命時代の大衆という人間類型にもっとも適合する、エゴイズムの内的正当化の手段であった。ブルクハルトはこのようなドイツの歴史意識に意図的な見解の典型を認め、これを醸成したドイツ史学を「ジャーナリズム」と呼び、これを批判するだけでなく、講義「歴史の研究について」にもこれに対抗するような章句を設けている。すなわち、序論第1節に配置された「世界史における幸福と不幸について」である。過去を幸不幸の観点から判断することは、現在を過去からの歴史的過程の完成としてとらえ、現在を基準として過去を裁断するような歴史観を容認する。幸不幸の判断がしばしば現在との同質性の有無によって判断されてきたことをブルクハルトは見逃さない。そこでは現在の願望・利害が相対化されることなく絶対化されているのであり、したがって認識は公正さを著しく欠くことになる。彼は学生たちに幸不幸の概念そのものの相対性を示しつつ、これを歴史認識の領域から駆

逐して、認識の客観性を保持することを主張する⁽⁵³⁾。

ブルクハルトが行ったヨーロッパ主義的歴史学講義は、以上のような現在を絶対化するようなドイツ主義的歴史学講義に対抗しながら、全体として教養ある市民の育成に寄与するものである。歴史を通した市民教育こそブルクハルトの知的営為の目的である。講義の主要テーマを一貫して流れる「ヨーロッパ的なもの」とは、「権力と偶像、金銭だけでなく精神をも愛する⁽⁵⁴⁾」ような心的態度に象徴され、これはその広い視野から自国中心的な国民主義の欺瞞を自ずと看破する力をもつ。そして、それは彼の講義に促されて行う脱専門的な歴史研究を通じて、ヨーロッパの市民としての自己意識を醸成しつつ、教養ある市民の内面に関わってくる。したがって、ブルクハルトが育成しようとする教養ある市民は、国民意識というものを媒介にして国家権力に迎合するあり方、すなわち革命時代に支配的な大衆のあり方の対極に立ちつつ、その存在をもってこれを批判する。そのような人物が一定数社会に存在することによって、社会はさまざまな意図的な見解、煽動にたいして健全な審判を下せるようになり、国家による「上」からの支配を抑止することになるだろう。まさにそのような社会のあり方こそ、「帝国主義的専制や神権政治に黙々としたがわかない⁽⁵⁵⁾」ヨーロッパ的な社会の革命時代における唯一可能なあり方であるとブルクハルトは考えた。彼が行った歴史学講義は教養ある市民にたいする教育機能を介しながら、そのような社会の形成を意図したものであり、これは彼自身が感得したこの時代における歴史学が担うべき役割を果たすものである。

ブルクハルトはまさにこのような教育を行うことに革命時代における歴史家の使命を認識した。したがって歴史家は歴史教育者たらざるをえない。市民教育を教育目標においたバーゼル大学に彼が自らの活動の場を見いだした理由は、以上の論究からも明らかであろう。そしてさらに、つぎのことも指摘しておかなくてはならない。多様な民族の集合体であるヨーロッパの市民としての自己認識は、単一の国家権力に全国民が結集する大国家の国民よりも、スイス連邦のような多民族からなる小国家の連合体の国民に適合する。多様性礼賛はスイス的思考の特性である⁽⁵⁶⁾。とりわけ、ドイツ・フランスとの国境付近に位置するバーゼルの市民は、人文主義的伝統と相まって、ヨーロッパ的生の本質たる「調和ある不調和」にたいする感受性を自然と育んでいた。バーゼル大学は、そのようなスイス・バーゼル出身の学生達によってその大半を占められており⁽⁵⁷⁾、この未来の教養ある市民の基礎教育を教育の

基軸としていた。専門化・学術組織化の進行にともないますます「市民教育」から離れつつあるドイツ諸大学のなかで、このような市民の内実に深く関わるバーゼル大学の存在に、ブルクハルトは「形而上学的必然性⁽⁵⁸⁾」を感知し、この大学における講義活動に生涯を捧げたのである。

おわりに

1872年は歴史教育者ブルクハルトにとって、重要な意味をもつ年である。念願の「ギリシア文化史」の講義草稿が完成し、この年の夏学期から講じられはじめた。試行錯誤を繰り返してきた主要テーマの講義サイクルはこれをもって不動のものとなり、彼がもつ教養ある市民層への教育計画をもっとも反映したものとなった。「特殊な学識を伝授することよりも、世界にたいする歴史的考察に向けて普遍的な関心をもたせること⁽⁵⁹⁾」に自らの任務を洞察したブルクハルトの教育実践もこれで堅固な基盤を得たことになる。研究者としての著述を断念し、このような小さな大学における市民教育に専念し、文字通り「ただ自らの教職に生きる」ことに現代の歴史家がとるべきひとつの道を彼は見いだしたのである。

この年、ブルクハルトにたいしてベルリン大学から招請があった⁽⁶⁰⁾。新生ドイツ帝国の首都に位置するこの大学が、ランケの正教授就任以来ドイツ史学の総本山ともいべき存在であったこと、莫大な国家予算から配分された潤沢な研究費と完備した研究・教育施設を背景に、世界的な学術機関としての地位を誇っていたこと、さらにこの大学における正教授ポストが多く、研究者にとって垂涎的であったこと、これらはいずれも周知の事実であろう。ブルクハルトがこの名誉ある招請を固辞したとき、彼の立場は改めて自覚され、歴史教育者としての生き方は決定的なものとなったのである。招聘拒否のあと、講義草稿に加筆されたものが「19世紀における歴史学」および「われわれの課題」であり、これはそのような彼の自覚を色濃く反映したものである。そして、この章句に示された内容は、学生にたいする彼の教育の史的立場づけを明確化するだけでなく、ベルリン大学の「ランケ・ゼミナール」からはじまった彼自身の歴史家人生にたいするひとつの「決算」を意味した。ブルクハルトをドイツ史学界全体の流れのなかに位置づけ、彼を真に理解しようとするとき、この歴史教育者として自己決定した彼自身の意図につねに立ち返る必要があるだろう。

このようにブルクハルトのバーゼル大学における具体的な教育活動をふまえつつ、彼が遺した業績を読み

直すとき、旧来のテキスト解釈とは異なるさまざまな意味連関を読みとることができる。そして、そこには19世紀におけるヨーロッパ社会の諸状況が、ブルクハルトの語る言葉、あるいは彼のとった行動を通じて、個性的な形姿をとりつつ立ち現れる。ブルクハルトにかんする伝記的事項は、彼の遺した業績の解釈をより重層的なものにする可能性を秘めている。そして何よりも、同時代の人々に語りかける歴史教育者の道を自覚的に歩んだブルクハルトの業績を真に評価するためには、彼が働きかけようとした19世紀世界との関わりが第一級の重要性をもつことは論をまたないであろう。全体像を指向した新たなブルクハルト研究は、性急な現代的解釈ではなく、あくまで19世紀の歴史的文脈のなかから模索されるべきである。

[註]

- (1) 最近とくに盛んに行われているものが、美術史家としてのブルクハルトの業績の掘り起こしとその分析・評価である。vgl. Jacob Burckhardt, *Ästhetik der bildenden Kunst : der Text der Vorlesung ; zur Einleitung in die Ästhetik der bildenden Kunst*, aufgrund der Handschriften kommentiert und herausgegeben von Irmgard Siebert, Darmstadt 1992.; Martina Sitt, *Kriterien der Kunstkritik : Jacob Burckhardts unveröffentlichte Ästhetik als Schlüssel seines Rangsystems*, Weimar 1992.; Peter Ganz, *Jacob Burckhardts Kultur der Renaissance in Italien und die Kunstgeschichte*, in : *Saeculum*, Bd. 40 (1989).
- (2) Jacob Burckhardt, *Briefe. Vollständige und bearbeitete Ausgabe. Mit Benützung der handschriftlichen Nachlasses* (Br.), 10 Bde, hrsg. v. Max Burckhardt, Basel 1949-1986.; Werner Kaegi, *Jacob Burckhardt. Eine Biographie* (JB.), 7 Bde, Basel 1947-1982.; Jacob Burckhardt, *Über das Studium der Geschichte. Der Text der Weltgeschichtliche Betrachtungen nach den Handschriften*, hrsg. v. Peter Ganz (USG.), München 1982.; Ernst Ziegler, *Jacob Burckhardts Vorlesung über die Geschichte des Revolutionszeitalters in den Nachschriften seiner Zuhörer* (RZ.), Basel 1974.
- (3) Friedrich Jaeger, *Bürgerliche Modernisierungskrise und historische Sinnbildung : Kulturgeschichte bei Droysen, Burckhardt und Max Weber*, Göttingen 1994.; Irmgard Siebert, *Jacob Burckhardt. Studien zur Kunst- und Kulturgeschichtsschreibung*, Basel 1991.
- (4) つぎのものを参照のこと。岸田達也「ブルクハルトの『歴史の研究について』—いわゆる『世界史的考察』としての受容の問題—」『研究紀要(日本大学人文科学研究所)』第43号, 1992年。岸田達也「ブルクハルトの『歴史の研究について』—「新稿」の「序論」の構成を中心として—」『史叢(日本大学)』第48号, 1992年。
- (5) Br., Bd. III, S. 276 f., an Peter Merian vom 7. Feb. 1858.
- (6) Br., Bd. VI, S. 115, an Friedrich von Preen vom 17. Nov. 1876. 19世紀当時のドイツ大学の「大科学主義」と対比しながら、専門特殊化した知識ではなく全体性をもった教養を求めるブルクハルトとバーゼル大学との内的な関係をガンツも指摘している(Peter Ganz, *Jacob Burckhardt und die*

Universität, in : *Georgia Augusta* 45 (1986), S. 28 f.)。しかし、これはベルリン大学とは対照的な小規模大学であったこと以上にはバーゼル大学の具体的な形姿を提示しておらず、ブルクハルトとの関係も理念的な説明にとどまっている。

- (7) 学生数は各学部最低数を示し、高齢の教授陣は周辺の他大学の学問的水準から大きく遅れをとっていた。Andreas Staehelin, *Die Universität Basel zu Anfang des 19. Jahrhunderts, ihr Verhältnis zum Staat und ihre Reorganisation im Jahre 1818*, in : *Basler Zeitschrift für Geschichte und Altertumskunde* (BZGA.), Bd. 52 (1953), S. 110 ff.
- (8) Andreas Müller, *Struktur und soziale Funktion der Universität Basel* (Diss.), Winterthur 1955, S. 15 f.
- (9) 独立国家としての意識が強いバーゼルでは、この処置をVerstaatlichungと呼び、ナポレオン統治下のヘルヴェチア共和国期に導入された国家の教育機関監督権に法的淵源を求めている(Staehelin, a. a. O., S. 121.; Edgar Bonjour, *Die Universität Basel von den Anfängen bis zur Gegenwart 1460-1960*, Zweite, durchgesehene Auflage, Basel 1971, S. 336 ff.)。州立大学は初等・中等教育機関と同様、教育評議会 Erziehungsrat の管理下におかれ、評議会の専門委員会にあたる大学事務局 Curatel が大学にたいする直接の監督機関である。これが中心となって大学組織・運営上の抜本的改革を断行した。諸改革は、バーゼル大学の学問上の水準向上、同時代の新しい学問体系への組織上の対応を第一の目標とし、その一環として、三学部の講座系列の改編、教員の諸待遇向上、選考規定の抜本的改革による教員の質的向上そして哲学部の改組とそれとともなう大学予科の設置などを行った(Staehelin, a. a. O., S. 130 ff.)。ドイツ国内の大学と比較して、一般に改革が遅れていたスイス・オーストリアの諸大学(Josef Engel, *Die deutschen Universitäten und die Geschichtswissenschaft*, in : *Historische Zeitschrift* (HZ.), Bd. 189 (1959), S. 282.)のなかにあつて、1818年のこの改革は異彩をはなっているといつてよい。
- (10) 1823年に発布された「哲学部にかんする規程」によれば、同学部は「大学における一般学問的な教育の代表部であり、一面的な職業教育に抗してこの教育を促進することに任務がある」とされている(Andreas Staehelin, *Geschichte der Universität Basel 1818-1835*, Basel 1959, S. 71.)。このように改革後のバーゼル大学哲学部は、専門学部に要求された職業教育に一気に傾斜するのではなく、あくまで旧来の基礎教育的機能を活かしながら、新たな役割を模索した点に大きな特徴をもっている。その具体的な現れが教員の大学予科への出向である。ギムナジウム(6年制)卒業生を収容する大学予科(3年制)は、主として大学各学部における学修にたいする準備教育を行う中等教育機関であるが、大学事務局員が議長を務める教授団の管理下におかれている点(Th. Burckhardt-Biedermann, *Geschichte des Gymnasiums zu Basel*, Basel 1889, S. 218 f.)で、大学の下への延長組織としての性格をもつ。1865年までは、施設も大学と共有し、授業をCollegium, 教室をHörsaalと呼ぶなど、生徒の意識においても大学との一体感は強かった(ebd., S. 219 f.)。
- (11) Paul Burckhardt, *Geschichte der Stadt Basel von der Zeit der Reformation bis zur Gegenwart*, Basel 1942, S. 215 f.; vgl. *Verhandlungen über die Theilungsfrage in Betreff der Universität Basel vor der eidgenössischen Theilungskommission, als bestelltem Schiedsgerichte*, Erstes Heft, Aarau 1834.
- (12) Müller, a. a. O., S. 19 f.
- (13) このような都市内での新住民層と旧市民層の対立は、ブルクハルトの思想と知的営為に大きな影響を与えたと思われる

- る。この点にかんしてはつぎのものを参照のこと。拙稿「青年ブルクハルトと都市バーゼルの危機——伝統的市民社会の解体と文化史学——」『西洋史学』第158号, 1990年。
- (14) この要求にしたがって, 1852年に3年制の実業学校が設置されたが, これは1835年に認可された非古典語系の大学予科実科部(2年制のちに3年制)を改組したものである。これによって, 人文ギムナジウムから大学予科へと進む人文系中等教育にたいする, 実科ギムナジウム(1837年に認可されたギムナジウム実科クラスを基礎に1852年に成立)から実業学校へと進む実科系中等教育がバーゼルにおいて整備されたことになる(Burckhardt-Biedermann, *a. a. O.*, S. 227 f.)。ドイツ・プロイセン(1859年に第一種および第二種実科学校を認定)と対比して, バーゼルにおける実科系中等学校が比較的早期に法的認知を得てきた背景には, 州分割後の連邦内での孤立, 深刻な経済危機などから, 都市内の経済市民層との妥協を余儀なくされたバーゼル支配層の苦しい立場があったと思われる。
- (15) Georg Samuel Koprio, *Basel und eidgenössische Universität Basel* (Diss.), Basel 1963, S. 47. 当時, 『チチェローネ』執筆のためにイタリア旅行の途上にあったブルクハルトも大学の将来にたいする危機感をつのらせていた(*Br.*, Bd. III, S. 187, an Andreas Heusler-Ryhiner vom 13. Feb. 1854.)。連邦立大学構想は, 1854年の連邦議会で, 連邦工業専門学校 Polytechnikum (のちのチューリッヒ連邦工科大学 ETH.) 設立に変更され, 事態の収拾が図られた(Koprio, *a. a. O.*, S. 45 f.; Albert Teichmann, *Die Universität Basel in den 50. Jahren seit ihrer Reorganisation im Jahre 1835*, Basel 1885, S. 20.)。
- (16) この論争において大学人も積極的に公聴会に参加し, さまざまな大学擁護論が出版物の形で公開された。vgl. J. Schnell u. C. F. Schönbein, *Die Universität von Basel, was sie fordert und was sie leistet*, Basel 1851.; *Die Hochschule der schweizerischen Eidgenössenschaft und alte Universität Basel*, Basel 1851.
- (17) Müller, *a. a. O.*, S. 21.
- (18) ブルクハルトの大学における歴史学講義は一定して週5時間であったが, 大学予科における授業は, 美術史講義を兼務する1874年にいたるまで6時間から8時間にのぼっていた(Paul Roth (Hg.), *Aktenstücke zur Laufbahn Jacob Burckhardts*, in: *BZGA.*, Bd. 34 (1935), S. 79 ff.)。また, 正教授ブルクハルト採用にかんする教育評議会から市長への上申書(1858年2月3日付)には大学・大学予科における職務と並んで, 公開講演を義務づけることが明記されている(ebd., S. 70)。
- (19) Vgl. Ernst Walther Zeeden, Jacob Burckhardt. Die Persönlichkeit und geistige Gestalt in Urteil und Erinnerung der Zeitgenossen, in: *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*, Jg. 26 (1952), S. 239 ff.; Elisabeth Pistor-Frey und Ernst Ziegler, Karl Frey, ein Schüler Jacob Burckhardts, in: *BZGA.*, Bd. 70 (1970), S. 184 ff. のちにベルン大学正教授となるフェッター Ferdinand Vetter は1866年から約3年間バーゼル大学に在籍し「革命時代史」ほかブルクハルトの講義を聴講した。彼が講義に際して筆記したノートは, ツィーグラーによって講義再現のために活用されている(Ziegler, *RZ.*, S. 510, 537 f.)。このフェッターがブルクハルトに招かれ, 彼の私宅を訪問したときの思い出は, ブルクハルトの最初の伝記を著したトロークによって美しく描かれている(Hans Trog, Jakob Burckhardt, in: *Basler Jahrbuch 1898*, Basel 1898, S. 153-156.; Ernst Ziegler, Ferdinand Vetter, ein Schüler Jacob Burckhardts, in: *Archiv für Kulturgeschichte* (AKG.), Bd. 53 (1971), S. 332 ff.)。これは, ブルクハルトと学生との自由な交流をもった独特の知的雰囲気を与えるエピソードであり, わが国でも『ギリシア文化史』の邦訳者, 新聞良三氏によって紹介されている(新聞良三訳『ギリシア文化史』第1巻, 東京堂 1948年, 510頁以下)。
- (20) August Rüegg, *Die beiden Blütezeiten des Basler Humanismus*, Basel 1960, S. 47 ff.
- (21) Friedrich Meinecke, Ranke und Burckhardt (1948), in: Eberhard Kessel (Hg.), *Zur Geschichte der Geschichtsschreibung* (Friedrich Meinecke Werke, Bd. VIII), München 1968, S. 93. 中山治一, 岸田達也訳『ランケとブルクハルト』創文社, 1960年, 3頁以下。
- (22) Friedrich Nietzsche, *Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten*, Einleitung (1871), in: Nietzsche, *Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe*, Bd. I, Berlin 1988, S. 652.
- (23) Kaegi, *JB.*, Bd. IV, S. 8 ff.
- (24) ブルクハルトの教職にかんする公文書によれば, 五つの時期の授業負担はつぎの通りである。第1期: 歴史学講義5時間, 予科授業6時間。第2期: 歴史学講義5時間, 予科授業7時間(1866年からは8時間)。第3期: 歴史学講義5時間, 美術史講義3時間, 予科授業4時間。第4期: 歴史学講義5時間, 美術史講義5時間。第5期: 美術史講義5時間(Roth, *a. a. O.*, S. 62 ff.)。
- (25) Kaegi, *JB.*, Bd. IV, S. 16. 個々の講義の成立過程, 内容についてもケーギが詳細な史料を提示している(vgl. Kaegi, *JB.*, Bd. V.)。
- (26) *Ebd.*, S. 14 f.
- (27) Ziegler, *RZ.*, S. 563 ff. これは, バーゼル大学の学期報告 Semesterberichte に依拠したものであり, 私講師時代からのブルクハルトの全講義題目を学期順に網羅したものである。これには各講義の週あたりの時間数や聴講者数も収録されている。
- (28) Jacob Burckhardt, *Historische Fragmente* (HF.), Stuttgart 1957, S. 77.
- (29) *Ebd.*, S. 192 f.
- (30) 「革命時代史」はブルクハルトの講義のなかでもっとも回数多く(12回)講じられたものであり, もっとも多くの聴講者(一般聴講者もあわせると常時50名以上)を集めた講義である(Ziegler, *RZ.*, S. 563 ff.)。講義サイクルの構成からも判るように, 大学における講義担当者としては, ブルクハルトの着眼点はヨーロッパ近現代史におかれていた(Kaegi, *JB.*, Bd. V, S. 3 f.)。その点において, 彼は恩師ランケと共通点を持つ。ブルクハルトは1841/42年冬学期, ベルリン大学において学生として, このランケの近現代史講義を聴講していた(Otto Markwart, *Jacob Burckhardt. Persönlichkeit und Jugendjahre*, Basel 1920, S. 398.)。なお, ランケが行った近現代史講義全体についての考察はつぎのものが行っている。Rudolf Vierhaus, Rankes Verständnis der “neuesten Geschichte”, in: *AKG.*, Bd. 39 (1957), S. 85 f.
- (31) Ziegler, *RZ.*, S. 15 f.
- (32) *Ebd.*, S. 15.
- (33) *Ebd.*, S. 52 ff. つぎのものを参照のこと。仲手川良雄『ブルクハルト史学と現代』創文社, 1977年, 29頁以下。
- (34) Ziegler, *RZ.*, S. 305.
- (35) Jacob Burckhardt, *Gesammelte Werke* (GW.), Bd. V, Basel 1978, S. 4.
- (36) *Ebd.*, S. 12.
- (37) たとえば研究・教育関係事項における古代ギリシアと近現

- 代ヨーロッパの比較についてはつぎの箇所を参照のこと。
GW., Bd. VIII, S. 280, 339, 374, 383.
- (38) Wolfgang Weber, *Priester der Klio. Historisch-sozialwissenschaftliche Studien zur Herkunft und Karriere deutscher Historiker und zur Geschichte der Geschichtswissenschaft 1800-1970*, Frankfurt am Main 1987, S. 53. この時代のドイツ諸大学における歴史学教育の動向とブルクハルトの知的営為との関係については、つぎのものを参照のこと。拙稿「ブルクハルトとドイツ諸大学における歴史学教育——ジーベルによる歴史学ゼミナール導入との関連で——」『史林』第78巻6号, 1995年。
- (39) Karl Alexander von Müller (Hg.), *Nachträge zu den Briefen Leopold Rankes an König Maximilian II. von Bayern*, München 1939, S. 20.
- (40) *HZ.*, Bd. I (1859), Vorwort.
- (41) マイネッケの指摘以来、注目を集めたブルクハルトの時代判断は、ナチズム台頭から第二次大戦にいたる強烈な歴史体験のもとで、民主主義の終焉・大衆社会の到来といった彼の予見的・反近代的な同時代判断の側面に注目が集まりすぎたきらいがある。そのため、そもそも歴史学にとって彼の時代がいかなる時代として判断されていたかが看過されがちであり、時代判断者としてのブルクハルトが、彼の文化史的業績から離れて一人歩きする傾向にあった。時代判断と文化史学、この両者の間にできた溝を埋めるためには、彼の歴史学にたいする時代判断を精査し、そのなかから彼の歴史学講義・教育計画の意味が考察される必要がある。
- (42) Vgl. *USG.*, S. 47 f.
- (43) *Ebd.*, S. 246 f.
- (44) *Ebd.*, S. 247 f.
- (45) *Ebd.*, S. 249.
- (46) *GW.*, Bd. V, S. 4 ff.
- (47) Jörn Rüsen, Jacob Burckhardt, in: H.-U. Wehler (Hg.), *Deutsche Historiker III*, Göttingen 1972, S. 7 f. 末川清訳「ヤーコプ・ブルクハルト」(『ドイツの歴史家 第2巻』ドイツ現代史研究会訳, 未来社, 1983年, 所収) 34頁以下。
- (48) *USG.*, S. 249 f.; *GW.*, Bd. V, S. 9.
- (49) *HF.*, S. 267.
- (50) *USG.*, S. 249 f.
- (51) *Ebd.*, S. 110 f.
- (52) *Ebd.*, S. 117.
- (53) *Ebd.*, S. 245.
- (54) *HF.*, S. 193.
- (55) *Ebd.*, S. 192.
- (56) Werner Kaegi, *Discordia concors. Vom Mythos Basels und von der Europa-Idee Jacob Burckhardts*, in: Marc Sieber (Hg.), *Discordia concors. Festgabe für Edgar Bonjour zu seinem siebzigsten Geburtstag am 21. Aug. 1968*, Bd. I, Basel 1968, S. 146 f. 坂井直芳訳「ディスコルディア・コンコルス」(『みすず』127号, 1970年所収) 39頁以下。
- (57) 1870年以降の出身地別学生数を見ると、バーゼル、スイス出身の学生は常時全体の85%前後を占めていた。(Teichmann, *a. a. O.*, S. 63.)
- (58) *Br.*, Bd. VI, S. 68, an Paul Heyse vom 12. Nov. 1875.
- (59) Jacob Burckhardt, *Gesamtausgabe*, Bd. I, Stuttgart 1930, Einleitung, S. IX.
- (60) Kaegi, *JB.*, Bd. IV, S. 30 ff.